

パーソン・センタード・セラピストとして倫理的であることに関する一考察

関西大学大学院心理学研究科博士課程後期課程 並木 崇浩

要約

本稿はパーソン・センタード・セラピーの倫理について、倫理規定ではなく、原理や実践のあり方そのものという視点から論考するものである。個人内の倫理として、自己決定権の尊重と非指示性をめぐる Cain (1989, 1990) と Grant (1990) の論争を中心に概念的整理を行った。次に、関係性の倫理として、関係的信頼と反抑圧実践について概観し、パーソン・センタード・セラピーとの関連を論じた。以上を踏まえて、倫理的なセラピーを実践するためのセラピストの課題を論じ、Bond (2015) が提唱する倫理的マインドフルネスと「contemplate」(並木, 2018; Namiki, 2021) との関連性を指摘した。最後に、倫理を論じることと実践することのパラドクスについて考察し、セラピストは倫理を学びつつも常に自身の倫理は何かを問い続け、作り上げる必要があることを論じた。

キーワード：パーソン・センタード・セラピー、自己決定権、関係的信頼、倫理的マインドフルネス

はじめに

セラピスト (Therapist、以下 Th) はなぜクライアント (Client、以下 Cl) に心理的支援ができるのだろうか。Cl は Th との治療、査定、教育、助言といった、様々な関わりを通して、変化が促されたり生じたりしている。つまり、心理的支援とは他者への介入であり、よって Cl に何らかの利益や意義をもたらしている、もしくは害ではないことが求められる。ここで、なにももって利益や害とするか、その是非を基礎付けるものが倫理である。なぜなら、倫理とは他者といかに関わるべきかを論じるものだからである (Levinas, 1961/2005)。このように心理臨床の根源をなす倫理を、倫理規定やガイドラインのような「かくあるべき」と定めた制約ではなく、原理として捉え直す動きがある (Bond, 2006; British Association for Counselling and

Psychotherapy, 2002)。また、心理療法とは倫理の実践であるとして、倫理を Th の臨床実践のあり方の出発点であり実践そのものである、という主張も存在する (Grant, 2004; Schmid, 2013)。このように、倫理を他者といかに関わるかと捉えると、心理臨床における倫理とは Th のあり方、そして Th の哲学的価値観と深く結びついていることがうかがえる。心理臨床の中でも、パーソン・センタード・セラピー (Person-centred therapy、以下 PCT) は Th の態度や、Cl と Th の関係性を重視する学派であり、(Rogers, 1951; Mearns & Cooper, 2017)、その特徴を倫理の観点から捉えることができるだろう。そこで本稿では、PCT の倫理に着目し、倫理と Th のあり方について論考を行う。まず、PCT における倫理の位置付け、倫理の捉え方の変化を概観する。具体的には、個人内の倫理と関係性の倫理の二つに焦点を当て

る。個人内の倫理として自己決定権の尊重をめぐる論争の論点を確認する。そして関係性の倫理について、関係の信頼と反抑圧実践の概念を通して、概念的整理を行う。次に、整理された結果から、PCTのThが倫理実践を行ううえで取り組むべき課題、さらに倫理を論じることと実践することについて考察する。

倫理的概念：自己決定権の尊重

PCTにおいて最も重視される倫理的概念のひとつが、自己決定権の尊重である(Grant, 2004; Proctor & Keys, 2013)。Rice & Moon (2018)は人間の最も基本的な権利、生存権は「自由権、自己決定権、つまり移動する、思考する、感じる、そして選択する自由」(p. 131)と置き換えることができるとし、PCTはCIの自己決定権を第一に置くと述べる。Grant (2004)も、「PCTとは他者の自己決定権を実直に尊重する実践である」(p. 158)として、PCTの倫理的正当性を論じている。PCTには根源的な人間観として、実現傾向、つまり人は成長する、発展する、変化する力を内在しているという考えがあり(Rogers, 1957a)、自己決定権の尊重の意義を裏付けている。また、PCTにおいて非指示性とは、「CIに特定の影響をもたらそう、特定の変化を引き起こそうという意図がないこと」(Grant, 2004 p.158)であり、自己決定権を尊重した概念といえる。そしてThの中核条件、一致、無条件の肯定的関心、共感的理解の態度は非指示性の体現であることから、PCTはCIが自己決定できる場を作り出す実践といえるのである(ibid)。

CIの自己決定権や自律性を重んじることは、おおよそどの心理療法でも受け入れられているといえるが、PCTにおける自己決定権の尊重の倫理が持つ特異性を象徴するテキストとして、Cain (1989, 1990)とGrant (1990)の非指示性をめぐる論争がある。Cain (1989)は、Rogersの時代からPCTの特徴とされてきた非指示

性に関して、PCTのThが固執し過ぎていることを問題視し、Thが重視すべきは非指示的に関わるのではなく、CIの成長がより促進されるあり方を選択することだと論じた。このCain (ibid)の主張に対し、Grant (1990)は非指示性を道具的非指示性と原理的非指示性に分け、Cain (1989)が述べているのは道具的非指示性であり、PCTの本質は原理的非指示性だと反論したのである。つまり、道具的非指示性は「それは成長を促進するか?」(Grant, 1990 p.81)を問いに立てているとGrantは指摘する。CIに効果的「だから」非指示的に関わるのであり、指示的な関わりの方が効果的だと考えれば指示的になるというように、Cainの考えの下では非指示性は交換可能な手法として扱われている。一方、原理的非指示性は「それはCIを尊重しているか?」(ibid p.81)という問いに立つ。CIを尊重するThの態度であり、CIの成長を促すための手段ではない。また、CIという個人、他者を承認する(acknowledge)ためにThがとれる態度の必然であり、CIの特質やニーズによって替えられる類のものではない。Grant (1990)が「このような議論は心理療法の道徳的側面が中心に置かれた時に生じるのだ」と論文を締め括ったように、Cain (1990)はPCTの道義(moral)とは(CIの視点からみて)CIにとって役に立っているかであるべきであるとして、Grant (1990)の反論に再反論している。この論争においてGrantが提示した道具的非指示性と原理的非指示性は、臨床場面でThが指示しないことを貫くとか、指示的な行動を取るか否かといった行動レベルで区分されていない。「原理的非指示性の態度を真に生きるThはときに極めて指示的にみえることがある」(ibid p.83)。Grantが指摘しているのは彼らが第一に置くPCTの倫理、そしてパラダイムの違いである。Cainが、CIにとって有益であるから、つまり効果に従属する形で非指示性の意義を示す一方で、GrantはCIへの尊重、その原理に直結する形で非指示的態度を説明しており、原理

的非指示性において非指示性は効果と呼ばれるものに先立っているのだ。原理的非指示の立場からすると、PCTから起こり得る自由は、CIを自律的な存在にすることではなく、自律的な存在としてCIを尊重することで実現するのである(Grant, 1990)。これは、必要十分条件によってパーソナリティ変化を起こす (make) のではなく、起きる (occur) という記述に通じているといえるだろう (Rogers, 1957b)。

以上、セラピーにおける倫理としてCIの自己決定権の尊重を取り上げ、その実践としてのThの非指示性に関する論争を概観した。そして、原理的非指示、道具的非指示、どちらの立場においても、PCTにおける倫理が単なる倫理規定といった外的な規則ではなく、Thの態度や実践そのものと深く結びついていることを確認した。では次に、PCTの倫理を関係的側面から捉えてみる。

関係性の倫理

臨床場面において、CI-Th関係が心理療法の成功要因として重視される一方で (Cooper, 2008)、非対称なパワーバランスになりやすく、Thが権力 (power) を持ちやすいこともこれまで指摘されてきた (Proctor, 2017; Totton, 2006)。つまり、CI-Thの関係性は治療的性質を有しつつ、倫理的課題が生じる可能性も孕んでいるといえる。また、問題を抱えたCIと、専門家として査定し治療を施すThという伝統的な捉え方ではなく、心理療法をCIとThが関わり合う実践、現実そのものとする、社会構築主義的視点を取り入れたポストモダンの心理療法では、関係性の倫理がより重視されている (McNamee, 2009)。このように、心理療法において個人の倫理から関係性の倫理へと関心が移り変わっている中 (Bond, 2015)、Proctor & Keys (2013) は倫理を、個人間、文化、属性といった様々な要素を考慮した力動的な意思決定プロセスだとした。本節では関係性の倫理として、

Proctor & Keys (2013) がPCTの倫理を論じる中で取り上げた、関係的信頼 (relational trust) と反抑圧実践 (anti-oppressive practice) の概念から捉えていく。

1. 関係的信頼

CIとThという複数の人間が関わる以上、関係上の問題や困難が生じることは避けられない。人間の脆弱な領域や、社会的に望ましくないとされるような感情や思考、行動などが取り扱われる心理療法では特に、そのような困難がどう扱われるか、またCIとThの信頼関係によって、心理療法がCIにとって治療的な体験にも、トラウマティックな体験にもなり得る。この信頼の概念を心理療法の根源的な倫理とするBondの考えを中心に、関係的信頼を概観する。

Bond (2006) は、自律性、自己決定権の尊重の倫理の意義を認めつつも、CIの文化的背景によってその重要度が変化するものであると主張する。そして、心理療法に内在する、より関係的でローカルな倫理、つまり信頼の倫理の重要性を指摘している (ibid)。さらにBond (2015) は、CIとThが差異や不平等といった関係性にまつわる倫理的課題に応じるには、二人が互いを信頼し、信頼されることが必要だとして関係的信頼の倫理を説いた。Bond (2007) は信頼を「差異、不平等、リスク、そして不確かさに由来する困難に持ち堪えられるだけの十分な質とレジリエンスを備えた関係性」(p. 436) と定義する。つまり、Bond (ibid) は信頼とは関係性の質やそのしなやかさと、関係性に存する潜在的脅威との動的な均衡だと捉えている。例えば、CIとThの年齢、性別、文化や生まれといった差異は、それらから生じるお互いの常識や規範の違いを理解しようとするのではなく、拒否、排除し相手を「赤の他人にする (making a stranger)」(ibid, p. 438) 危険性を孕んでいる。関係的信頼の倫理として、このような困難に応じること、そして応じられるだけの信頼関係を築くことが求められる。また信頼を、互い

が信頼し、信頼されるという関係的に捉えると、Thが一方向的に倫理的責務を負うのではなく、CIとThの両方が、共に責任を負い、共に関係性を構築し、維持する存在となる。

2. 反抑圧実践

反抑圧実践とは、北米や英国のソーシャルワークの領域から発展した、社会的抑圧によって困難を抱えた人々のエンパワメント、その抑圧からの解放を目指す実践である(二木、2017; 栄留、2019)。例えば貧困の問題に対して、CIの個人的要素(怠惰や心理的弱さなど)を原因とみるのではなく、貧困を社会構造(人種や職業差別など)から生じる抑圧の結果だと考え、その不当な抑圧に抵抗し、CIの権利を取り戻すのである(栄留、2019)。このように、反抑圧実践はCIの個人的な問題を、様々な属性や立場の差異による権力の不均衡から生じる社会的問題として捉え、かつCIが持つ文化的、地理的背景などを考慮してアプローチする(Burke & Harrison, 1998)。反抑圧実践の考えを心理療法に応用すると、CIとThの関係性や権力の力動とは、Th、CIという役割、お互いの性別、年齢、国籍、性的志向、障害、家族構成、文化的背景などによって影響され、またそれらによって状況化された(situated)ものと捉えることができる。Mearns(1994)はPCTの文脈において、語られざる関係性という概念を用いて、CIとThの中で暗黙のうちに作られた規範が制限となってお互いの表現を妨げる関係性の力動を説明している。このような状況化された関係性の力動に対してProctor & Keys(2013)は、CI-Thの権力構造を既に形作られた公平な関係に変えようとするのではなく、CI-Th関係がどのような要素から影響を受けて構築されているのかについてThがセンシティブになること、そしてその関係性がいかにCIにとって抑圧的になっているのかを理解する必要があると述べる。Mearns(1994)も同様に、CI-Thの語られざる関係を修正するのではなく、CIとThがその

関係性を探求する、語ることの意義を強調している。また、以上のようなCIとThの属性や背景によって作り出されたCI-Th関係に焦点を当てるミクロな視点だけでなく、CIとThの背景である社会それ自体を対象としたよりマクロなアプローチ、パーソン・センタード・ソシオセラピーが提唱されている(Schmid, 2015)。従来の反抑圧実践はCIが抱える困難の要因として社会構造を強調し、構造的抑圧に対して「抵抗」できるようCIをエンパワメントすることを目指す。一方で、PCTはCIの内的な要因ではなくCI-Th間の関係性の不均衡、権力関係に焦点を当てた際、CIとThはそれらに抵抗するのではなく、「理解」しようとする点が特徴といえるだろう。つまり、平等な関係性といった理想像を設定するのではなく、CI-Thのパワーバランスをお互いが十全に体験し、自由に表現し合い、向き合うことを通して、二人の出会い(encounter)が深まり、結果的に抑圧的な関係性が解消されていくのである。

以上、自己決定権の倫理、また関係性の倫理を关系的信頼と反抑圧実践の概念を中心に概観し、PCTの実践との関連について述べた。これらを踏まえると、PCTはCIが自身の生き方を決定する、自己決定権を尊重する実践である。しかしそれは、CIが自由に体験し、振る舞える治療的風土を、Thが一方向的に提供するというモデルではなく、人と人とが関わることで生じる、不平等やリスク、そして権力構造を、CIとThが共に気づき、困難に直面しながら、CIとThが互いを信頼し合う治療的な関係性を創造するプロセスだといえよう。

セラピストの成長課題：いかにして倫理的なセラピーを実践するか

前節までで論じてきたように、倫理的PCTとはCIの自己決定権を尊重すること、CIとThが二人の関係性から生じる課題に取り組むこと、つまり理想的な理念ではなく行われるべき実践

である。では、そのような実践をするために考えるべきThの課題はなにか。Casemore (2009)は、倫理を外的な権威として規定し、Thに要求することは不適切だと指摘する。むしろ倫理観や倫理的原則は、Th個人から由来し、発展することが重要であり、またThは自身のあり方 (way of being) として倫理観を自己の一部として統合することが求められるのである (ibid)。倫理がかくあるべきという行動指針ではなく、より個別的でローカルな、CIとThの関係に取り組みことであるならば (Bond, 2006)、Thは自身、CI、そして関係に開かれており、また自身が倫理的であるか問い続けなければならない (Proctor & Keys, 2013)。このようなThが自身へ問う方法として、倫理的マインドフルネスが挙げられる。Bond (2015)は倫理的マインドフルネスを、「現代の社会生活の複雑性と多様性に応じて、倫理的な感受性と思慮深さ (フェルトセンス) に基づいて行動することで、専門的かつパーソナルな誠実さに献身すること」 (p. 302) と定義している。理論のみ、または自身の感情のみに基づいて倫理的判断を決定するのではなく、生じている倫理的問題に対してThが自身のフェルトセンス、気付きの辺縁 (the edge of awareness)、違和感に開かれることで、その問題がより鮮明になり、これまで気付かなかったその問題の他の側面を発見することができる (Bond (ibid) は主張している。ここで、倫理的マインドフルネスとは、Th自身のフェルトセンスのみにアクセスすることだと誤解してはならない。理性や感情、言語、リスクアセスメントなど、様々なThのリソースや思考と、Th自身を相互作用させ、感じられる自身の体験に開かれることを意味しているのである (Bond, 2015; Proctor & Keys 2013)。また、倫理的マインドフルネスは、「ひとがある問いを立て、自身のことば、思考、そして体験をもって意味や答えを探求する行為」である、「contemplate」 (並木、2018; Namiki, 2021) と重なる点が大いといえるだろう。倫

理的マインドフルネスがThの内的なりソースを活用することを描写しているのに対し、「contemplate」はThの内的リソースに加え、問い自体をTh自身が立てることを強調しているといえる。

倫理的マインドフルネスや「contemplate」といった行為は、セラピーという倫理実践を明確にするというよりも、Thが他者との関わりに臨むための一助と位置付けられる。Bond (2000)は倫理的マインドフルネスを倫理規則への無批判な遵守と対比して位置付けている。すなわち、倫理的であるとはThが自身の倫理実践に対する責任を負うことである。一方で職業団体の規則にただ従って行動することは、その責任からの逃避を意味し、まさに非倫理的なのである (ibid)。Thは臨床実践で生じる倫理的ジレンマという不確かさから逃れることはできない。これは、倫理という観点からみたPCTのThのあり方といえよう。なぜなら、PCTのThは、自己をセラピーに、CIとの関係の中に投入すること (Mearns, Thorne & McLeod, 2013)、また必要十分条件 (Rogers, 1957b) を始めとする外的な知識や原理を信奉するのではなく、学びや臨床の中から問いを立て、その問いの意味や答えを探求することを通して、唯一無二の自身のあり方や実践を作り上げていくことが求められるからである (並木、2018)。つまり、自身にとっての倫理を探求し、臨床の中でその倫理をいかに十全に生きられるかが、PCTのThの課題といえる。ただし、Mearns (2003)が指摘するように、特に初学者のThが自身のあり方を探求し、それをセラピーに活用することを目指すうえで、スーパーヴィジョンを含めたトレーニングが欠かせないことは留意しておくべきだろう。

倫理を論じることと実践することをめぐって

最後に、倫理を論じることと実践すること、を主題として論考を試みる。本稿では、倫理を

実践上の禁止事項やガイドラインといった規則ではなく、実践の基礎そのものと捉え直されてきた変遷として、CIの自己決定権の尊重に始まり、関係的信頼、反抑圧実践といった関係性の倫理を概観した。そしてThの課題として、臨床の中でその倫理をいかに十全に生きるか、そのために外的な知識や原理を信奉するのではなく、自身にとっての倫理を探求すること、を提示した。しかし、この課題は一見すると本稿の前半の主張と相反するだろう。なぜなら、自己決定権の尊重や関係性の倫理が、規則ではなく原理や実践そのもののあり方だとしても、理論や記述として論じる以上、外的な知識としての性質は拭えない。そして、Thが成長するうえで知識を信奉するなどいいながら、PCTにおける自律性の倫理や関係性の倫理という知識とその重要性を論じてきたからである。さらに、Thの成長課題として、先に概観したような倫理の内容を提示したわけではない。本稿で論じてきた、PCTの倫理という知識に基づいて、その倫理を実践するためにはThが知識としての倫理を手放して、自らの倫理を探求することが重要だと主張することは矛盾しているといえるだろう。しかし、この矛盾こそがPCTの豊かなパラドックスだと筆者は考える。

PCTでは人間がよりそのひと自身になっていくこと (becoming a person)、つまり、社会的に適応するために演じていた役割から自由になり、自身がなにを考え、感じているか、その体験により気づいていき、その体験をより信賴していくことができるプロセスを重要視している (Rogers, 1995)。そして、CIがひと (person) になるには、Thもそのひと自身になる必要がある (Schmid, 2001)。そのひと自身になるといふ考えを踏まえると、倫理的マインドフルネスが倫理実践において重要であるという考えに対して、「本当に自分はその考えを重要だと思っているのか」と問う必要がある。なぜなら、倫理的マインドフルネスの考え自体に対する自身の考えや思いに開かれる、マインドフルにあ

ることが求められるからである。さらに、非指示性をめぐるGrantとCainの論争から、PCTの根源的な倫理はCIの自己決定権の尊重であると無批判に受け入れること、それを強いることは、まさにBond(2000)が批判した非倫理的なあり方といえよう。つまり、PCTやPCTの倫理を学び、その知識に基づいて実践しようとするればするほど、学んだ知識ではなくTh自身の考えや体験に基づくことになるのである。

例えば、あるThがPCTで最も重要な倫理はCIの自己決定権の尊重だと考え、実践を続けていたとする。その中で、本当に自己決定権を尊重することがこのCIとの関わりにおいて倫理的といえるのだろうかかと疑問に思う場面があるかもしれない。その際に、「正しい」倫理は自己決定権の尊重なのだからそのような疑問は捨てるべきだと考えることもできるが、それはThがそのひと自身になるとは真逆の結果を生むだろう。自身の疑問が間違っていると切り捨てるのではなく、むしろその疑問と向き合うことで、CIを尊重することの意味への確信が生まれるかもしれないし、自身の別の倫理観に気づくかもしれないというように、自身が持つ倫理観を深めることができるだろう。Grant(2004)はPCTとは規律であり、原理的非指示性や中核条件を身につけるには、Thは自らを律し、制限する必要があると述べている。しかし、個々のThが倫理的になっていくにはという点において筆者は、Grant (ibid) の考えはThを倫理的なあり方から遠ざけると考える。なぜなら、「正しい」倫理のあり方を規定して、Thが無批判に従うことに繋がるからである。ここで筆者は、心理臨床や、PCTにおける倫理とはなにかを論じることを批判しているのではない。当然、PCTにおける第一倫理はCIの自己決定権の尊重なのか、CIに効果があることなのかという論争、一者関係ではなくCI-Th関係自体を扱う関係性の倫理が重要であるといった論考は、我々に多くの学びと刺激を提供しており、意義がある。その一方、個々のThが実践をするうえで、論じ

られた倫理と自身の倫理を区別するべきであり、自身の倫理は自ら作り上げるしかないと主張しているのである。

結語

PCTの倫理として、行動指針のような倫理規定ではなく、Thのあり方や実践そのものを基礎付ける倫理について本稿は論じてきた。CIの自己決定権の尊重、関係性の倫理を概観し、それらの倫理を実践する上でThに求められる課題として、倫理的マインドフルネスという態度の重要性を提示した。最後に、よりPCTの倫理的なThであろうとするには、これまでに論じられた倫理に従うのではなく、Thが自らの倫理観や倫理的あり方を模索し、作り上げる必要があることを論じた。

文 献

- Bond, T. (2000). *Standards and ethics for counselling in action*(2nd), Sage.
- Bond, T. (2006). Intimacy, Risk, and Reciprocity in Psychotherapy: Intricate Ethical Challenges, *Transactional Analysis Journal*, 36 (2), 77-89.
- Bond, T. (2007). Ethics and psychotherapy: An issue of trust. Ashcroft, R. E., Dawson, A., Draper, H., & McMillan, J. (Eds.), *Principles of health care ethics*(2nd), 435-442, John Wiley & Sons.
- Bond, T. (2015). *Standards and ethics for counselling in action*(4th), Sage.
- British Association for Counselling and Psychotherapy. (2002). *Ethical framework for good practice in counselling and psychotherapy*. Rugby, UK.
- Burke, B. and Harrison, P. (1998). Anti-oppressive practice, In R. Adams, L. Dominelli & M. Payne (Eds.), *Social work: Themes, issues, and critical debates*, 229-238, Basingstoke: Macmillan.
- Cain, D. J. (1989). The paradox of nondirectiveness in the person-centered approach, *Person-Centered Review*, 4(2), 123-131.
- Cain, D. J. (1990). Further thoughts about nondirectiveness and client-centered therapy, *Person-Centered Review*, 5(1), 89-99.
- Casemore, R. (2009). Relational ethics as a way of being. In L. Gabriel & R. Casemore (Eds.), *Relational Ethics in Practice: Narratives from Counselling and Psychotherapy*, 23-31, Routledge/Taylor & Francis Group.
- Cooper, M. (2008). *Essential research findings in counselling and psychotherapy: The facts are friendly*, Sage.
- 栄留里美 (2019) 子どもソーシャルワークにおける反抑圧実践理論の意義と可能性に関する研究, 福祉社会科学, 11, 1-14.
- Grant, B. (1990). Principled and Instrumental Nondirectiveness in Person-Centered and Client-Centered Therapy, *Person-Centered Review*, 5(1), 77-88.
- Grant, B. (2004). The imperative of ethical justification in psychotherapy: The special case of client-centered therapy, *Person-Centered & Experiential Psychotherapies*, 3, 152-165.
- Levinas, E. (1961). *Totalite et Infini. Essai sur l'intériorité*, Martinus Nijhof. 熊野純彦 (訳) (2005) 全体性と無限, 岩波書店.
- McNamee, S. (2009). Postmodern psychotherapeutic ethics: Relational responsibility in practice, *Human Systems: The Journal of Therapy, Consultation & Training*, 20(1), 57-71.
- Mearns, D. (1994). *Developing Person-Centred Counselling*, Sage.
- Mearns, D. (2003). *Developing Person-Centred Counselling*(2nd), London: Sage.
- Mearns, D., Thorne, B., & McLeod, J. (2013).

- Person-centred counselling in action (4th)*, Sage.
- Mearns, D., & Cooper, M. (2017). *Working at relational depth in counselling and psychotherapy*. Sage.
- 並木崇浩 (2018) パーソン・センタード・セラピストが‘哲学する’意義：beingとセラピストの自己の利用の観点から、人間性心理学研究、36(1), 69-77.
- Namiki, T. (2021) How can a focus on the principles of self and integration enhance the effectiveness of training for person-centred therapists?, unpublished master dissertation, the University of Nottingham.
- 二木泉 (2017) ソーシャルワークにおける反抑圧主義 (AOP) の一端—カナダ・オンタリオ州の福祉組織の求人内容と組織理念を手がかりとして—。社会福祉学, 58(1), 153-163.
- Proctor, G. (2017). *The dynamics of power in counselling and psychotherapy: Ethics, politics and practice (2nd)*, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Proctor, G. & Keys, S. (2013). Ethics in practice in person-centred therapy. In M. Cooper, M. O’Hara, P. Schmid & A.C. Bohart (Eds.), *The Handbook of Person-centred psychotherapy and counseling*, 422-435, Hampshire: Palgrave Macmillan.
- Rice, B., & Moon, K. A. (2018). Client-centered: An ethical therapy. In M. Bazzano (Ed.), *Re-visioning Person-Centred Therapy*, 128-136, Routledge.
- Rogers, C. R. (1951). *Clients-centered therapy: Its current practice, implications, and theory*. Boston, MA: Houghton Mifflin.
- Rogers, C. R. (1957a). A note on the “nature of man”, *Journal of Counseling Psychology*, 4(3), 199-203.
- Rogers, C. R. (1957b). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change, *Journal of consulting psychology*, 21(2), 95-103.
- Rogers, C. R. (1995). *On becoming a person: A therapist’s view of psychotherapy*, Houghton Mifflin Harcourt.
- Schmid, P. F. (2001). Authenticity: the person as his or her own author. Dialogical and ethical perspectives on therapy as an encounter relationship. And beyond. In G. Wyatt (Ed.), *Rogers’ Therapeutic Conditions Evolution, Theory and Practice. Volume 1: Congruence*, 213-228, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Schmid, P. F. (2013). The anthropological, relational and ethical foundations of person-centred therapy. In M. Cooper, M. O’Hara, P. F. Schmid, & A. C. Bohart (Eds.), *The handbook of person-centred psychotherapy and counselling*, 66-83, Houndsmill, England: Palgrave.
- Schmid, P. F. (2015). Person and society: Towards a person-centered sociotherapy, *Person-Centered & Experiential Psychotherapies*, 14(3), 217-235.
- Totton, N. (2006). Power in the therapeutic relationship, *The politics of psychotherapy: New perspectives*, 83-93, Open University Press.